

## &lt;全体分析&gt;

試験時間 75 分

**解答形式**

論述・計算が中心で、空欄補充・記述・描図などが含まれる。

**分量・難易 (前年比較)**

分量 (減少・やや減少・**変化なし**・やや増加・増加)

難易 (易化・**やや易化**・変化なし・やや難化・難化)

**出題の特徴**

岩石・地質分野からの出題がなかった。字数指定の論述問題が大問のすべてに出題され、配点に占める割合が高い。計算問題については、煩雑な計算を必要とする問題はなかった。

**その他トピックス (入試改革の方向性を踏まえた目新しい出題など)**

宇宙分野で、多くの論述問題が出題された。なお、入試改革の方向性を踏まえた出題はなかった。

## &lt;大問分析&gt;

| 番号 | 出題形式                     | 出題分野・テーマ         | 範囲       | コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)  | 難易度 |
|----|--------------------------|------------------|----------|---|-----|
| I  | 空欄補充<br>記号選択<br>記述<br>論述 | 地質・地史<br>(地球の歴史) | 地学<br>基礎 | 問 1 先カンブリア時代と顕生代の境界の絶対年代を問う選択問題で、易しい。<br>問 2 地質時代に関する基本的な用語を問う記述問題で、易しい。<br>問 3 地球大気の変遷に関する基本的な記述問題で、易しい。<br>問 4 示準化石に有効な生物種の特徴を論述する頻出問題で、易しい。  | 易   |
| II | 空欄補充<br>計算<br>描図<br>論述   | 固体地球<br>(地磁気)    | 地学       | 問 1 地磁気に関する基本的な知識を問う記述問題で、易しい。<br>問 2 伏角の大きさを求める計算問題であるが、直角三角形の辺の比が $1 : 2 : \sqrt{3}$ であることから、求めることは容易である。<br>問 3 地球を双極子磁場とみなしたときの描図問題で、教科書にも掲載されている図であることから、難しくはないであろう。<br>問 4(1)は、磁気異常の縞模様と海洋底拡大説の関係を問う論述問題で頻出の内容ではあるが、50 字という文字制限があるので、慣れていないと手間取るかもしれない。(2)は海洋底の拡大速度を求める計算問題で、煩雑な計算は必要ないため、やや易しい。<br>問 5 ダイナモ理論のメカニズムに関する論述問題で、メカニズムをしっかりと理解している受験生は少ないと考えられ、やや難しい問題である。 | やや易 |

|     |                              |                                      |                     |  |     |
|-----|------------------------------|--------------------------------------|---------------------|--|-----|
| III | 語・記号<br>選択<br>記述<br>計算<br>論述 | 大気・海洋<br>(エネルギー<br>収支と大気の<br>運動, 海洋) | 地学<br>基礎<br>+<br>地学 | 問1 大気圏に関する選択問題で、(2)ではやや詳細な知識を問うものも含まれているが、標準的な問題である。<br>問2(1)は海洋の層構造に関する基礎的な記述問題で、易しい。(2)は海水の塩分の変化に関する論述問題で、易しい。<br>問3 海洋の層構造に関する基礎的な記述問題で、易しい。<br>問4 エネルギー収支に関する計算問題で、易しい。<br>問5(1)はハドレー循環に関する論述問題で、70字の字数制限はあるが、頻出問題であるため解答しやすい。(2)は海洋の鉛直循環に関する記述問題で、標準的な問題である。                              | やや易 |
| IV  | 記述<br>計算<br>論述               | 宇宙<br>(惑星の運動,<br>恒星, 銀河と<br>宇宙)      | 地学                  | 問1 ハッブルの法則に関する論述問題で、法則を理解していれば、容易である。<br>問2 パーセクの定義に関する論述問題で、字数制限もないため、やや易しい。<br>問3 ハッブル定数を用いて宇宙の年齢を求める計算問題で、頻出問題ではあるが、単位の換算や指数の取扱いに慣れていないとやや難しい問題である。<br>問4 ビッグバン宇宙論に関する論述問題で、詳細な知識が必要であり、やや難しい。<br>問5 主系列星のエネルギー源に関する記述問題で、易しい。<br>問6 会合周期に関する計算問題で、公転周期を求め、そこから会合周期を計算する二段階の作業が必要であり、やや難しい。 | 標準  |

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

### <学習対策>

教科書に掲載されている図や地学現象に関連する問題が多く出題され、基本用語やメカニズムを忠実に理解していれば、確実に得点できる。そして、考察を必要とするような問題は少なく、全体的な難易度は高くないため、高得点を取りやすかったと思われる。

基本的な用語や重要な地学現象に関しては、確実に理解し、50～100字程度で素早く的確にまとめる方法を身につけることが大切である。計算問題の対策としては、様々な分野から出題されるため、公式だけではなく、数値の取り扱い方に慣れるように過去問などを用いて、問題演習などをしっかりしておく必要がある。また、教科書などに掲載されている図や、実習・観察のページにあるグラフなどを実際に自分で描いてみることも重要である。

教科書間の掲載内容にバラツキがある以上、自分が使用している教科書の他に、過去のセンター試験・共通テストや二次試験などに目を通しておく必要がある。地学は問題集が少ないため、オープン模試や記述模試なども活用して学習していこう。